

36. 少子化対策と不妊治療

医事万華鏡

少子化と呼ばれて久しい昨今。そのことは単純に労働人口の減少ばかりでなく、高齢化とセットで考えれば、社会保障費の増大を招き、延いては国力や経済の縮小へと繋がります。まさに少子対策は喫緊の課題と言えましょう。

そこでこの人口減少による問題を解決する方法としては、単純に労働力を補うためにロボットやAIの力を借りて生産性を向上させるというのも一法ですし、海外から移民を受け入れるという方法もあるでしょう。ただ、もつとも有効な方法は、まさに日本人の出生率を増やすことです。

もつとも、出生率を上げるといっても、普通は結婚して夫婦となり子どもを持つという流れを辿る以上、晩婚化が進んでいる日本で出生率を上げるためには、結婚して子どもを持つという前提から、考え直さなくてはならないのかもしれない。もちろん、結婚せずに子どもを持つ方もおられるので一概には言えません。一方で、結婚して子どもが欲しくてもできない夫婦もおられます。その方々が子どもが持てるような社会制度が整備されればと思っていた矢先、今年の4月より、一般的な不妊治療・生殖補助医療が保険適用となりました。今まで生殖補助医療は保険適用

外だったため、経済的な負担が大きく治療を断念せざるを得なかった方にとっては、まさに朗報と言えましょう。

とはいえ、不妊治療が保険適用となったこと自体は慶賀すべきことではありませんが、そこに拘泥しすぎると、かえって余計な苦しみを抱えてしまうケースもままあります。どうしても子どもが欲しいという思いが執念となり、ご夫婦の気持ちや行動がそこに縛られてしまうからです。「子宝」という言葉があるように子どもは宝ものです。であればこそ、ご夫婦の間で子どもに恵まれなくても、血縁関係を超えた「社会の中の子ども」を支えることもできるでしょう。一方で、子どものいない人生というものもあります。「幸せ」はまさにその人の心構え次第だからです。

さて、かつて日本でアニメ化され放映されたことのある『ニルスの不思議の旅』の作者であるスウェーデンの女流作家のセルマ・ラーゲルレーヴ（1858～1940）によると、福祉国家として有名なスウェーデンをはじめとした北欧諸国では、高齢者以上に大切にしているのは子どもであり、子どもは社会の財産という意識だそうです。

子どもが生まれ、成長していく過程で、家族という枠組みを超えて社会が子どもを育てるといった意識を持つこと。そのことこそ出生率を上げていくことと同時に、考えていく必要があることなのではないでしょうか。（JMS主幹・野村元久）

